

生活なくして富なし。

——ジョン・ラスキン『この後の者にも』

目次

謝辞
略語リスト

vii iv

第一章 経済の問題 1

推奨図書

原注 31 30

第二章 富ではなく生活を——ニュー・エコノミクス小史 33

推奨図書

原注 59 58

第三章 尺度——なぜ、貧困に見える太平洋の島国が
地球幸福度指数でトップになったのか? 61

中米の好成績 64

小さな島国の好成績 66

基本的な問題——貨幣で真の富は測れない

ニュー・エコノミクスによる打開策 84 67

推奨図書

原注 93 92

<p>第七章 資源——なぜ、キューバの修理工は世界一なのか？……………181</p> <p>基本的な問題——われわれの経済は廃棄物を出すようにできている……………184</p> <p>廃棄物を原材料にする新しい方法……………200</p> <p>ニユー・エコノミクスによる打開策……………187</p>	<p>第六章 生活——なぜ、現代のイギリス人は中世の農民より働くのか？……………149</p> <p>基本的な問題——システムが貧困をもたらす……………168</p> <p>ニユー・エコノミクスによる打開策……………154</p> <p>推奨図書……………178</p> <p>原注……………177</p>	<p>第五章 市場——なぜ、ロンドンの交通速度は常に時速一二マイルなのか？……………125</p> <p>基本的な問題——人間の動機に関する無理解……………139</p> <p>ニユー・エコノミクスによる打開策……………129</p> <p>推奨図書……………147</p> <p>原注……………147</p>	<p>第四章 貨幣——なぜ、中国はイラク戦争の費用を負担したのか？……………95</p> <p>基本的な問題——金融システムがもはや目的を果たしていない……………97</p> <p>貨幣を組織する新しい方法……………109</p> <p>ニユー・エコノミクスによる打開策……………116</p> <p>推奨図書……………122</p> <p>原注……………121</p>
--	--	--	--

推奨図書

原注

206 205

第八章 貿易——なぜ、イギリスは輸出するのと

同数のチヨコレートワッフルを輸入するのか? ……………

209

基本的な問題——間違つた相互依存は貧困につながる

ニユー・エコノミクスによる打開策

221 213

推奨図書

ウエブサイト

原注

232 231 230

第九章 コミュニティー——なぜ、ウォルマートが近くにあると投票率が下がるのか? ……

235

スーパーマーケットがもたらす問題

基本的な問題——効率と効果はイコールではない

ニユー・エコノミクスによる打開策

243 241 239

推奨図書

原注

256 256

第十章 債務——なぜ、マラウイの村人が

サーピトンの株式仲買人の住宅ローンを負担しているのか? ……………

259

基本的な問題——開発を妨げる障害

ニユー・エコノミクスによるアプローチ

275 265

推奨図書

286

	原注	287
	第十一章 未来……………	
	原注	307
	付録A 恐慌の残骸から——ニュー・エコノミクスが提案する、よりよい経済の 再建に向けた最初の二〇のステップ	309
	付録B ニュー・エコノミクスのツールと手法……………	331
	訳者あとがき	347
索引		1

第一章 経済の問題

人が自然との闘いについて語るとき、勝てば自分が敗者となることを忘れている。

——E・F・シューマッハー『スモール・イズ・ビューティフル』（一九七三年）

産業化した人間は、ミダス王のごとくふるまっている。自分の娘を黄金に変えてはじめて、自分の考えていた富には限界があると気づいた王のごとく。

——ポール・エキンズ『測れない富』（一九九二年）

ウォルト・ディズニーから金融危機について学べることはなにか。二〇〇七年の春、サブプライム住宅ローン危機が紛れもない現実となり、大手金融機関がそれまで資産と考えてきた証券化商品投資の中身を必死に探りはじめたころ、ニューヨーク近郊のコネティカット州にあるクレイトン・ホールディングズ社は、腕利きの調査員を雇った。クレイトン社は、高リスクの住宅ローンが悪評高いストラクチャード・インベストメント・ピークル（S I V）に組み込まれる前や後に、当該S

IVを購入するウォール街の大企業のためにローンを調査する仕事を専門としていた。ある住宅ローン・ポートフォリオの調査中、借り手の署名として「M・マウス」とだけ記されたポートフォリオが見つかった。

象徴的な瞬間だった。ミッキー・マウスが住宅ローンを借りられるなら、そのシステムにはわれわれを守るはずの抑制と均衡がまるで存在しないことは明らかだ。特にイギリス国民は、生活を支える「銀行」という偉大な機関が入念な調査と慎重な融資に力を注ぐものと信じつづけている。ところが現実には、他のさまざまな機関と同じく銀行も空洞化しており、入念な調査など行っていないなかった。マウス氏からの住宅ローンの申し込みをきちんと審査してもっと早い段階で拒否する銀行幹部もいなかった。

深刻な危機だった。しかし、前例がまったくないわけではなかった。一九二九年のウォール街大暴落が起こる前には、ラジオ株の大ブームがあった。一九八七年の株価暴落の前には、ジャンク債ブームが起きていた。ドットコム・ブームのあとにはドットコム企業の「バブル崩壊」が続いた。そして今回の二〇〇八年の恐慌は、不動産・信用ブームに続くものだった。小説家トム・ウルフが「宇宙の支配者」と呼んだ人々にとっては常に予想外の出来事として襲いかかるが、昼のあとに夜が来るのと同じく確実に、金融市場の異常な活況のあとには必ず金融パニックが訪れるものなのだ。^[1]ひと握りのスケープゴートが非難され、場合によっては刑務所に送られる。規制が強化され、やがて再び緩和される。しかし、主要な関係者を桁外れの金持ちにすることを主な目的とする巨大なシ

システムの中心に金融市場があるという根本的な問題は、決してきちんと取り上げられることがない。経済システムにまつわる他の構造的な問題も見過ごされる。こうした構造によって、力を握る者は過ちを許され、厳しい情勢から守られ、夢を実現するのに十分な資金を手にする。その一方で、それ以外の人々は疲弊し、世界の三分の二を占める貧困層の生活は苦しみにさいなまれる。ジョン・メイナード・ケインズの言葉を借りれば、「経済の問題」はまだ解決されておらず、解決の見込みもほとんどないように思われるときもある——金融機関が二〇〇八年のような壊滅的な破綻を経験したときでさえそうだった。

重要なのは、金融市場の破綻が問題のごく一部であるという事実だ。それは経済についてもはや成り立たなくなった想定に動かされて、世界を襲っている危機を表す氷山の一角にすぎないのだ。今回の破綻——そして第二次世界大戦以降、通貨危機は四〇回以上起きている——は、ひと握りの者が他の者の道を破壊して自分たちだけ経済的至福に至るというゆがんだ夢が終焉に向かう最初の一步だ。そんな暴拳を地球が許すはずがない。人間の心情としても、そんなことは受け入れられない。それでも経済学は、とにかく受け入れよと訴えているらしい。両立しえない矛盾の様相がしだいに強まっている。解決する道はあるのだろうか。

本書では、解決の道はありと提言する。それは「ニュー・エコノミクス」というアプローチだ。もっと正確に言えば、幻の富ではなく真の富を重んじ、人と地球を第一に考えるさまざまなアプローチの集積である。喜ぶべきことに、すでに数十年前からこのニュー・エコノミクスの種は芽生えの兆

しを見せており、世界のもつさまざまな力を多様なかたちで取りまとめようとしている。倫理的に生産された地産地消の食材が注目を集め、本物志向が強まり、倫理的ビジネスや倫理的投資やフェアトレードが拡大し、建築家から経済学者に至るまであらゆる人のあいだで意図的に収入を抑えてよりよい生活を送ることを自然から学ぶ「ダウンシフティング」が大きく広がっていることに、その兆しは現れている。このニュー・エコノミクスは従来と違う枠組みにもとづくもので、成功を測るのにこれまでと違う物差しを使う。金銭的成長と真の富の違いを認める。その基本原理はコミュニティやビジネスでは受け入れられているが、政府の象牙の塔に住まう学者と彼らの伝統的な経済思考にはほとんど浸透していない。

ニュー・エコノミクスの考え方は、新しいものではない。ニュー・エコノミクスに関する本は、ニュー・エコノミクスという言葉自体は使っていないにしても、すでに何冊も書かれている。しかし強く求められていたのは、識者や専門家のみならず経済学者でない人も対象として書かれ、ニュー・エコノミクスの伝統、指標、実践、主張を説き、それらを政策立案者が理解して利用することのできる言葉で表現した本だった。われわれはここでニュー・エコノミクスのレンズを通して世界の仕組みを観察し、伝統的な見方に対して生じる斬新な疑問をいくつか見出すことで、そうした本を執筆しようとしてきた。われわれはなぜ、中世の農民より労働時間が長いのか。世界一の修理工がキューバ人というのはどういうことか。イギリスが、輸入するのと同量のチョコレートワッフルを輸出するのはなぜなのか。これらの問いのひとつひとつが、ニュー・エコノミクスのさまざまな側面への足が

りとなる。ニュー・エコノミクスの中核にある「富」の見方を論じる場合もあれば、さらにそうした見方でとらえた貨幣、貿易、労働、資源の意味を問うこともある。

そうした斬新な問いには互いに重なり合う部分もあるが、ニュー・エコノミクスの基本的な論点はおおむねカバーされている。本書では、富の尺度、貨幣、市場、労働、資源、貿易、コミュニティー、負債といったポイントを各章でひとつずつ取り上げる。

差し迫った危機の中身は、金融、気候、エネルギーなど実に多様だが、それはまた逆説的にチャンスでもある。深刻だからこそ、必ずならかの手が打たれる。現在の危機は、信用拡大による金融危機、気候変動の加速、それに最大産油量の縮小を背景とする不安定なエネルギー価格が結びついたものである。この三つの事象は互いに重なり合っていて、黄塵被害や倒産や失業が深刻だった世界大恐慌以来起きていないような、またおそらくそれ以前にもなかったような、とてつもない嵐に発展するおそれがある。

これらの差し迫った脅威の背後には、三つの根本的な危機がある。生態系、人間、精神の危機だ。これらは一般に経済の問題とは考えられていないが、実はまさに経済の問題そのものであり、方向性を誤った経済システムに突き動かされる間違った尺度と人を惑わす価値観から生まれた副産物なの